

「小町」の変遷（歌と伝説と能と）

同志社大学准教授

木谷真紀子

「卒都婆小町」という曲名が、一度聞くと忘れられないような印象を抱かせるのは、言うまでもなく「小町」が（美人）の代名詞であるからだろう。「小町」を地名などの下に付し、それを代表する美人を示すという語は、本曲が生まれた時代には見られないようだが、「卒都婆」という語との組み合わせいかにも奇異だと感じさせられる。「卒都婆を代表する美人」としても「卒都婆の美人」としても違和感があり、曲名からその内容を想像することが困難なのだ。「小町」の名が人間だけではなく、生誕地とされる秋田県の新幹線や米にも使われている今、美しく上質で特別という「小町」の印象はますます増幅し、それに従って「卒都婆小町」の曲名が与えるインパクトも大きくなる。

小町が（美人）の代名詞になった契機として、最初の勅撰和歌集『古今和歌集』が大きな役割を果たした。自分を愛した男性から不実を批判される歌や情熱的な恋愛の歌が収められており、女性としての小町の魅力を感じさせるのに十分だ。小町の歌は『古今和歌集』の仮名序で、撰者・紀貫之をして「あはれなるやうにてつよからず」「つよからぬはをうなのたなるべし」と女性の歌らしい優美さをたたえられ、六歌仙の一人に数えられている。さらに貫之は、「いにしへのそとほりひめの流」、「よきをうな」と小町の美についても触れた。「そとほりひめ」は允恭天皇の後であり、「衣通姫」と書く。「容姿絶妙で、その艶色が衣をとおしてかがやくので、

時の人が「衣通郎姫」といった」（『日本古典文学大系8 古今和歌集』昭和33・3・5、岩波書店）とされる絶世の美女であった。貫之は、歌人として名を残したばかりではなく、仮名序で後世に多大な影響を与え、また女性として書いた「土佐日記」で日記文学というジャンルを打ち立てた。日本文学史に大きな足跡を残す貫之によって、小町の美が（勅撰和歌集）に記されたことは、それ以前と以後に大きな意味を持つだろう。まず一つ目は、この時点で小町が既に（美女）として名を馳せていたのが分かることだ。そして二つ目は、その小町が（日本史上随一の美女）とまで高められ、数々の伝説を生む存在になる文学での出発が、歌人としての力と美しさの両方を記された、この『古今和歌集』にあるということだ。

（小町）は、当然ながら後世の文学や芸能にも多く描かれた。「小町物」と称され、能にも「通小町」「草紙洗小町」「鸚鵡小町」「関寺小町」「卒都婆小町」の現行五曲がある。しかし能に描かれた「小町」は、あまりにも我々の印象から乖離している。「草紙洗小町」は盛時の小町を扱ってはいるが、六歌仙の歌人としての小町を描く。「通小町」は小町物で唯一の夢幻能である。百夜通をなし得なかった深草少将が、死後もなお小町の成仏を妨げようとする妄執を語る。「鸚鵡小町」「関寺小町」「卒都婆小町」には、年老いた百歳の小町が登場するなど、能には小町の（美）を描いた作品が一切ないのだ。では金剛流で「三老女」とされる「鸚鵡小町」「関寺小町」「卒都婆

小町」の内容を確認しよう。「鸚鵡小町」では、百歳の老女になった小町に、陽成院が臣下を遣わして歌を届ける。小町は「所詮この返歌を唯一字にて申さう」と、その曲名が示す（鸚鵡返し）で見事に返歌し、和歌について語る。臣下の求めに応じて、在原業平の津島詣の法楽の舞いを真似て舞った後、「あら恋しの昔やな」と「杖に縋りてよるよると」自分の庵へ帰る。「関寺小町」では、近江国関寺の僧が寺の稚児を連れて「歌道を極めたる」と評判の老女を訪ねる。歌物語を話す中で老女が百歳を超えた小野小町本人だと知るが、小町は好きな歌の道だけを生き甲斐にした今の境遇を嘆く。夜になり、僧は小町と稚児を伴って七夕祭りに出掛けた。稚児の舞いを見る間に興を催した小町はよろめきながら舞い、最後はやはり「杖に縋りてよるよると」自分の藁屋に帰っていく。「卒都婆小町」では、都に上る途中で高野山の僧が休んでいると、老女が現れ卒都婆に腰をかける。僧は「教化して退けばや」とするが、老女は僧の間に間髪入れず答え、「げに本来一物なき時は仏も衆生も隔てなし」と論破する。僧が「古の名を名のり候へ」と尋ねると、老女は小野小町であることを明かし、乞食となった現在の境遇を嘆いた。その間に、かつて小町のもとに九十九夜通い、あと一夜を残して亡くなった深草少将が憑依して狂乱状態になる。やがて我に返り、「悟りの道に入らうよ」と舞台を去る。

このよう三曲に描かれた小野小町は、いずれもかつての美が見る影もないほどに落魄している。これは美人の零落した様を記した古書である『玉造小町壮衰書』が、『古今著聞集』や『徒然草』で小町を記した書として見なされているように「小野小町零落の伝説が発展して行つた」（佐成謙太郎『卒都婆小町 出典』『謡曲大観 第三卷』昭和39・2・10、明治書院）からであろう。しかし、小町はただの老女

ではなく、当意即妙で返歌し、歌の道を説くなど、歌に関する力により「小野小町」であることが確認される。また仏教問答で僧を論破できるような才気煥発な女性として描かれているのだ。

ここに「能」という芸能の特徴が表れているのではないだろうか。つまり、若さや美という誰の目にも明らかなものを称賛の対象にしないのである。特に金剛流では、ワキの僧が「心ある乞丐人御覽候へ」と小町に目を留め、問答で論破された後は「心ある乞丐人」「いかに乞丐人」と「乞丐人」であることを繰り返す。また老女が「小町」と名乗った後は「碧浪の翠髪をたたみ、彩雲の翠嶺にめぐれるが如し、暉暉ととのへる有様は 芙蓉の暁の波に浮かべるに異ならず」と華やかな詞章でかつての美しさを表現し、対比する形でそれを見失った今を強調しているのだ。

一方、僧をして「頭を地につけて三度礼」させる才気や歌の才能は、破れ笠で垢や脂にまみれた衣を纏った百歳の今になっても保ち続けることができる。しかし一目瞭然で分かるものではないため、小町に感服するのは、「鸚鵡小町」の天皇の臣下、「関寺小町」の稚児に和歌を教える僧、また「卒都婆小町」の仏教問答をしかける僧、という一定の評価者たり得る者だけである。小町は彼らに称賛され、一瞬は矜持を取り戻すものの、現在の自分に満足し続けるほど強くはない。「卒都婆小町」では、先述のように「小町」であることを名乗った途端、往事と現在を比し、落涙する。人間は誰もが、生きていくかぎり若さや美を失っていくが、その落差は「小町」であったがために大きくなる。「三老女」の「小町」は、才能と才気で他を圧倒しながらも、失ったものに固執し、その大きさを痛感して嘆かずにはいられない。伝説に生きる「輝かしい美女」ではなく、小野小町という（人間）が描かれていると言えよう。

先述したように、金剛流では「鶯鷓小町」「関寺小町」「卒都婆小町」が「三老女」とされているが、「関寺小町」演能の記録は「明治以降皆無」（『老女物』『能楽大事典』平成24・1・20、筑摩書房）であり、実質上は「卒都婆小町」が最も重い曲とされている。僧との問答には「漸増的に緊迫したやりとりをたためこむように盛り上げてゆく對話の妙」（里井陸郎『卒都婆小町』『謡曲百選（上）』その詩とドラマ）昭和54・5・10、笠間書院）がある。また昔を追憶する中で突如、自分に恋した深草少将を取り憑く。つまり百歳の老女から若い男性となって百夜通いを再現するなど、「この卒都婆の能ほど演者にとつて演じ甲斐のある曲はなく、又観る者にこれほど面白いのはいないと言つて宜い」（『三宅襄』『卒都婆小町』『能の演出』昭和23・3・1、能楽書林）とされ、劇的变化に富んでいる。三島由紀夫は、

「卒都婆小町」の卒都婆問答なんてかなり理論的ですね。あそここの問答には、お能の、原初的な（略）デイスカッションドラマとしての要素が入っている。（『三島由紀夫 三好行雄対談』三島文学の背景』国文学 三島由紀夫のすべて』昭和45・5）

と本曲に対話劇としての魅力を見出し、「卒都婆小町」を戦後を舞台に「卒塔婆小町」〔群像』昭和27・1〕として書き換えた。九十九歳の「昔小町と呼ばれた女」と「詩人」が公園で出逢い、会話をする中で、老女がその美を称えられた若かりし日の鹿鳴館の夜会の場面となる。老女がよろよろと舞う点では「鶯鷓小町」、若い男女のダンスと対比される点では「関寺小町」と、「三老女」の様々な要素が取り入れられている。「拙稿、三島由紀夫「卒塔婆小町論」——三つの対比を視座として——（『同志社国文学』61、平成16・11）で上記について触れている」小町自身も才気煥発で、かつての美を誇り驕慢ではありながら、今は乞食である点で能に描かれた小町と共通しているが、

三島作の小町は現況を嘆くことなどない。また深草少将の小町への愛情は、ワキの僧にあたる「詩人」に受け継がれ、小町を美しいと感じて恋に落ちる。能に表現されたような妄執にとらわれた恋というよりも、小町への感情を率直に表すのだ。

三島作「卒塔婆小町」は、「日本の新劇の最高峰の一つ」（下ナルド・キーン「解説」『近代能楽集』昭和43・3・25、新潮社）と絶賛され、「鹿鳴館」（『文学界』昭和31・12）と同じく、現在も再演が重ねられている。三島は鹿鳴館を描くことを「或現実の時代を更改し、そのイメージを現実とちがつたものに作り変へて、それを固定してしまふ作業こそ作家の仕事」（『美しき鹿鳴館時代』『新派プログラム』昭和37・11）と表現した。つまり「当時の錦絵や川柳によれば、まことに滑稽でグロテスク」（『同』）であつた鹿鳴館を「美しき鹿鳴館」として描き、人々の中に新たなイメージを作りだすことを「作家の仕事」としたのである。

三島の表現を借りれば、小野小町ほどその人物像が「作家の仕事」によつて変遷を遂げた女性はいない。詠んだ和歌によつて驕慢な絶世の美女となつた「小野小町」は、伝説では百歳まで長生きし、かつて手にしたもの全てを失うほどに零落する。そして能の舞台では百歳の老女となり、なお衰えぬ才気と歌の才能を有してはいるものの、失つたものに固執し、人間らしい嘆きと悲しみに襲われる。言わば観客の共感を得る「小町」として生きているのだ。

劇的变化に富む構成とともに、〈人間〉小町を味わい、触れることができることこそ、「卒都婆小町」が「これほど面白いのはいない」曲とされる所以であろう。